

私は今、女殺しの大罪人として、獄中でこの告白書を綴りつつあるのである。私が同棲者を殺して、死体を秘密室に隠してから、警官は度々私の家に捜査に来たけれども、何一つ証拠が挙がらず、また、私自身は、良心の呵責によって自白するような野暮な人間でないから、とうとういったんは有耶無耶に済んでしまい、私は平氣の平左で大道を闊歩していたが、第二の女と同棲するに至って、すっかりその女のために、心をかき乱され、その結果、自分の罪があらはれて、こうした囚われの身となってしまうたのである。その第二の女というのが、すなわち「鳥を飼う女」であって、私はこれから、私が固く心の内に秘めていた罪を如何に、この不思議な女のために白状させられたか、その顛末を書き記そうと思うのである。

順序として、私はまず、第一の同棲者を殺した次第を簡単に述べておこう。あの美しい、あの可愛い女を、なぜ私が殺したかという点、一口に言えば、嫉妬のためである。私の嫉妬心は自分ながら呆れるほど強く、いわば、病的であって、彼女と某舞踏場で馴染んで、郊外の私の家(洋館)に同棲するようになってから、私は、彼女を一步も外出させなかつた。私もまた決して外出しなかつた。彼女はそれを少しも不平に思わず、私たちの間には歡樂の日が続いたのである。

ところが、ある日私は彼女が誰かと手紙の遣り取りをしていることに気づいたのである。彼女には両親も兄弟もないと見えて、誰一人訪ねても来ず、また、郵便配達夫も一度も来なかつたが、それにも関わらず、彼女は何かの方法によって、誰かと文通をしているらしいことを私は知つたのである。私は彼女に向かって、手紙の主を打ち明けるように迫つたけれども、彼女は「そんなことはない」と言つて取り合なかつた。しかし、私がなおも執拗に迫ると彼女は文通をしていることを肯定して「たとえ死んでも、これだけは打ち明けられない」と言つた。私は何とかしてその手紙を手に入れたと思つたけれど駄目であつた。また、どういふ方法で文通が行われているかを知ろうと思つたけれど、やはり駄目であつた。私は一ヶ月に一、二度、深夜外出するだけであつたが、外出の時はあらかじめ彼女に麻酔剤を飲ませておいたので、彼女はとうとう私が世に「紳士盜賊」と称せられる職業を持つていることを知らず、従つて、私の留守の間に文通の遣り取りをするはずはなかつた。(私が紳士盜賊であることは、警察の人々にも、この告白書によって初めて知れるのである)

私は彼女が秘密の通信を行っているかと思うと、言うに言えないほど深い嫉妬の情に燃えたのである。彼女の漆黒の髪、雪白の肌、涼しい瞳、温かい唇を自由にしておりながら、彼女の心を我ものに出ることが出来ないかと思うと、私の彼女に対する愛情は、そのまま、憎悪の情に変わって行くのであつた。

私は彼女によって「可愛さ余つて憎さが百倍」ということわざを初めて体験したのである。

時々私は、彼女が私の職業を突き止めるために女探偵として私の家に入りこみ、警察と秘密の通信を行っているのではないかと思っただが、いかに目的のためには手段を選ばぬとはいえ、身を任せてまで探偵の職務を果たそうということは考えられないことであつたから、私は彼女が別の男とラヴ・レターを取り交わしているのだと邪推してしまつたのである。実際、今になって見れば、彼女は女探偵でも何でもなく、また、文通の主は「浮気男」ではなく、また、彼女が手紙の主を打ち明けなかつた理由もわかつて、私はひたすら私の邪推を恥ずかしく思っているのである。

日を経るに従つて私の嫉妬の情は募つた。いつ何時、彼女が私のもとを飛び出して、先方の男のもとへ走つて行くかもしれないという恐れは、遂に私をして、永久に、完全に、彼女を我ものにしようと決心させたのである。永久に完全に我ものにするにはその生命を奪うよりほかに手段はない。こう考えた結果、ある夜私は彼女を絞殺して、防腐剤を施し、地下室に隣合させた秘密室に棺を備えて、彼女を葬つたのである。

彼女の死んだことは誰にも知れないはずであるのに、彼女を殺してから四日目に、私は数人の警官の訪問を受けたのである。彼等はその後も二、三度令状を示して家宅捜索を行ったが、秘密室は私以外、何人も開けることが出来ないばかりでなく、その存在さえも気づかれないようになっていいるから、警官たちはいつも手を空しくして引きあげるよりほかなかつた。

前にも書いたごとく、私には良心の呵責というものがなく、あれほど可愛がつた彼女を殺しても、一度も夢に見たことがなかつた。それかといつて決して彼女を忘れたのではなく、時には秘密室に入つて、彼女の死体に見入ることもあつた。しかしながら、だんだん寂しくなつて来るに従つて、彼女の死体を見るだけでは満足出来ず、再び、かの舞踏場へ出入りするようになったのである。

この舞踏場は、古田男爵という若手独身の外交官の発起で建設されたものであるが、その古田男爵が、先日自邸の庭園を散歩しているとき、何者かに頸部を刺されて変死を遂げ、しかもその犯人が知れないので、舞踏場へ集まつてくる人々の間には毎晩、男爵殺しが話題となり、ある者はその原因を痴情関係だと言ひ、ある者は外交関係だと言つて、それぞれ勝手な憶測をたくましくするのであつた。

ある晩……それは私が女殺しを行つてから四十日ばかり経つた時のこと……私は二、三の知己と古田男爵の死について語り合つていたが、ふと私は、私たちの傍を通り過ぎた一人の女の顔を見てぎくりとした。何となれば、その女の顔が、私の殺した女と生き写しであつたからである。私は思わず立ち上がつて彼女の後をつけて行くと、彼女は庭園に出て、とある木陰のベンチに腰を下ろしたので、私は不躰にも彼女の傍に寄つて話しかけた。すると彼女もまんざら不愉快でもなさそうな様子をして私の言葉に相槌を打つたのである。

殺した女に生き写しの女を見ることが普通の人間にとつては気味の悪いことかもしれないが、私にとつては、殺した女に似ているということがかえつて、彼女に対して言うに言われぬ懐かしさを覚えさせたのである。彼女は死んだ女よりも若く見えるようなどこ

ろもあり、また、年取って見えるようなところもあったが、いずれにしても、まだ三十は越していないようであって、死んだ女と同じくチャーミングなところがあった。二、三度逢ううちに、どうやら彼女も私に愛着の心があるように思えたので、遂に私から同棲の話を持ち出すと、彼女は二つ返事で承諾してしまった。

不思議なことに彼女はその容貌が死んだ女に似ているばかりでなく、その境遇まで似たところがあるように思われた。と言っても、これは私の単に想像したことであって、彼女は両親や兄弟の有無を告げないばかりでなく、現在の住所さえ話すことを拒んだが、同棲した上は決して外出しないという条件を承諾したので私は彼女の身元を探るといふような野暮なことをしなかつたのである。そして彼女もまた、私に同棲者があつたかどうかを聞きもせず、私の職業さえも知ろうとしなかつた。

しかし、いよいよ同棲を承諾する前に、彼女は、

「わたしには、たつた一つ、付きものがあるけどいいの？」と尋ねた。

私はちよつと、判断がつかかねたので、

「何？」と尋ね返した。

「生き物だわ」

「生き物？ 犬？ 猫？」

「いいえ違う。鳥よ」

「鳥？」と、私はびっくりして尋ね返した。「鳥つてあの空を飛ぶ鳥？」

女はにこりと笑つた。「鳥なら鳥だわ。わたし鳥が好きでたまらないから飼っているのよ」鳥を飼う人間があろうとは私も今まで知らなかつた。私は平素鳥をあまり好まなかつたけれど、彼女が好きならば致し方がない、私は快く、鳥を連れてくることに同意した。

そのあくる晩、彼女は私と同棲するために鳥を連れてやって来た。鳥は首に金環をはめられ、かなり大きな籠の中に飼われていたが、彼女を私たちの寝室へ案内するなり、

「カー、カー」と、老婆のようなしやがれた声を出して二声鳴いた。私はぞつとしたが、彼女は鳥を寝室へ置くといつて聞かないので、その晩から、鳥の籠は寝室の一隅に置かれたのである。

かくて同棲の第一夜が来た。ふと、真夜中に私は彼女の寝言によつて目を覚ました。何を言っているのかわからなかつたが、最後に彼女がかなり大きな声をして、

「アレー」と叫ぶと、それとほとんど同時に、隅の鳥が「カー」と一声鳴いた。

深夜の鳥の声は気味の悪いものである。私はぞつとしたが、彼女は目を覚まसानかつたので、私も間もなく眠つた。

あくる日彼女は昨夜うなされたことについて何も言い出さなかつたので、多分、知らずにいただろうと思つて私も話さなかつた。が、二日置いて三夜目に、彼女は何やらぶつぶつ寝言を言い始め、最後に、

「アレー」と叫ぶと、鳥もまた「カー」と鳴いた。

彼女はやはり目を覚まसानかつたが、私は鳥の声を聞いてからしばらくの間、寝付くこと

が出来なかった。

それから更に二日置いた三夜目に、また同じことが起こった。私は鳥が「カアー」と鳴くなり、気味悪さに彼女を揺り起こした。

「ああ怖い！」と彼女は大いに目をむいて私の顔を見つめた。

「どうしたんだ？」と私は尋ねた。

「怖ろしい夢を見たのよ」

「どんな夢？」

私の問いには答えないで、彼女はただにこりと笑って私に抱きつき、私の胸に顔を埋めた。間もなく軽いいびきの声が聞こえ、私もいつの間にか眠ってしまった。

あくる日、客間で、彼女に昨夜の夢の話をする。彼女は寂しく笑って言った。

「夢って嫌なものねえ、あなた夢は見ない？」

「一度も見ないよ」

「まあ、いいことねえ。わたしも夢を見ない人間になりたい」

こう言って彼女はなぜか沈んだ顔をした。

しばらく沈黙が続いた、とその時、寝室で「カアー」と鳴いたので、彼女は立ち上って寝室へ入って行ったが、長い間出て来なかった。私も後から入って行くと、彼女は鳥を手に抱いて何か囁んでは、口から口へ食べさせていた。私はその姿を見て、ぞっとしたが、

「何を食べさせているんだい？」と聞くと、

「フクロウの肝よ。あなたも食べさせてやってみようかい」と言いながら、紙に包んだ、干からびた黒褐色のものを差し出した。私は気味が悪いので頭を横に振って立っていると鳥はじつと私に目を据えた。たとえそれが鳥であっても凝視されるということは嫌なものであるから、私は逃げるようにして寝室を出た。

それから二日過ぎて三夜目に、彼女は例の如くうなされたが、今度は寝言の終わり際ははっきりわかった。

「わたしが悪かった、義麿さん、堪忍して、よう。ああ、怖い、アレー」

途端に鳥が「カアー」と鳴いた。と、同時に、彼女はむっくりベッドの上に起きあがり、大きな眼をパチリと開いて、私の顔を見つめた。

「どうしたどうした、おい、夢だよ」と私も起き上がって彼女を慰めた。

彼女はしばらくの間、息をはずませながら、ぼんやり空間を眺めていたが、やがて、とぼけたような顔をして、

「私、何か言ってる？」と尋ねた。

「・・・・・・」

「ねえ、ちょっと、わたし今、何か言ったの？」

「何も言いやしないよ」

「いえ、確かに何か言ったわ、ねえ、話してちょうだい」

私はそれを話す元気がなかった。

「何だかよくわからなかったよ。まあいいから、寝よう」
彼女は素直に横になった。

それから二日過ぎて三夜目に、彼女は例の如くうなされた。

「わたしが悪かった、義麿さん、堪忍して、よう、ああ、怖い、アレー」

途端に鳥が「カアー」と鳴くと、彼女はむっくり起き上がり、何を思ったか急にベッドから飛び下りて、鳥をめがけて駆け出そうとしたので、私は慌てて彼女を引きとめた。引きとめられて彼女ははっと我に返ったらしく、しばらくあたりを見回していたが、

「まあ、わたしはどうしたんでしょう？」と尋ねた。

「夢を見たんだよ」

「夢を？ ではわたし、何か言いやしなかった？」

「何も言いやしないよ。早くおやすみ！」

「確かに何か言ったわ、ねえ、話してちょうだい」

「まあ、いいからおやすみ！」

「いいえ、話して下さらなきゃ、わたしもう寝ない」彼女は真面目な顔をした。

「それじゃ、明日の朝話してあげるから、今夜はおやすみ！」

彼女は素直にベッドに上がって、間もなく、すやすや寝入った。しかし、私はいつものように眠れなかった。私は彼女が寝言の中にはつきり言った「義麿」の名が、何となく気にかかったのである。義麿という男は何者か？ なぜに彼女はその男に堪忍してくれと言ったのか？ 義麿がなぜ怖いのか？ 私は彼女が何か深い秘密を持っていると推察し、その秘密をどうかして知りたいと思い始めた。

第一の同棲者には「手紙」の秘密があった。今、また第二の同棲者には「寝言」の秘密がある。私はよほど「秘密」に縁が深い人間だと思ふと同時に、何となく嫉妬の情に駆られるのであった。私はどうしても彼女の秘密を知らねばならない。

あくる朝、食後に、私は突然、

「お前、義麿という人を知っているかい？」と尋ねた。彼女はサツと顔を蒼くした。

「まあ、どうしてそんなことを言うの？ わたし、夢にでも喋ったかしら」

「うむ、義麿さん堪忍してちょうだいと言ったよ」

「あら、そんなことを言ったの、おかしいわねえ」彼女は強いて作り笑いをしたが、その手はぶるぶる震えた。

「義麿って誰だい？」

「そんなこと聞かないでちょうだい、昔のことはお互いに聞かないという約束じゃないの」

そう言われれば致し方がない。私は無理に口をつぐんだけれども、心は少しも落ち着かなかった。そしてますます嫉妬の情が募るのを覚えた。

それから二日過ぎて三夜目に彼女は例の如くうなされた。

「ああ、怖い、義麿さん、堪忍してちょうだい！ 私でないわよ。殺したのは鳥だわよ。」

ああ、怖い、アレー」

途端に鳥が「カアア」と鳴いた、彼女はむっくり起きてベッドを飛び降り、鳥の方へ走り出したが、私に引きとめられた。

「離してちょうだい、鳥が悪いんです。これから鳥を殺すんです」と彼女は夢中で口走ったが、急に我に返って、にこりと笑った。「あら、わたし、また飛び出したの？ わたし今、何か言ったの？」と、とぼけて尋ねた。

度重なる彼女の「うなされ」に、私の神経はだんだんイライラして来た。私は思わずキツとなつて「今夜こそはもう言わずにはおかない」と、言いながら、彼女の身体をグツと引き寄せた。

私があまりに真面目な顔をしたためか、彼女は死人のように蒼ざめて言った。

「おお怖い！ そんな顔をしては嫌よ。どうぞ、何も聞かないでちょうだい。これを話すくらいなら、私は死んでしまふ」

その様子がいかにもしつかりしていて、しかもいじらしかったので、私は黙って彼女を許して寝させたが、彼女が再び眠ったのにも関わらず、私は朝まで一睡もしなかった。

その翌晩も翌々晩も、彼女はうなされなかったけれど、私は眠られなかった。彼女の秘密と鳥の鳴き声とは私の心をかき乱した。嫉妬の情はいよいよ激しくなった。ともすれば私は、彼女も第一の女と同じ運命になるのではないかと思った。そして私の心は、いつしか決定していたのである。彼女に秘密を打ち明けさせるか、さもなければ第一の女のように……。

私がそういう恐ろしい心になったとき、彼女が先夜うなされてから三夜目が来た。果たして、夜中に彼女の寝言は始まり、最後に、

「ああ怖い、義麿さん、堪忍してちょうだい、私でないわよ、殺したのは鳥だよ。離してちょうだい、鳥を殺してくるから」

と言ったかと思うと、彼女はむくり起きて、何を思ったか私に飛びつき、私の首を絞めにかかった。

私ははつと思つて彼女の手を握り、力強く揺すつたので彼女は我に返った。

「あら、わたしどうしたんでしょう」

私はもう堪忍袋の緒を切らした。今夜こそは彼女に白状をさせるか、さもなければ、彼女を殺してしまおうと決心した。

私は彼女の手を強くつかんで言った。

「さあ、もう、何もかもお話し、話さねば殺してしまうよ」

「まあ、怖い！」と言つて彼女は私を見上げた。「どうぞ堪忍して頂戴！」

「いや、いかん、言わねばこの通りだ」

私は彼女の首に腕を巻いて、ぐっと絞めにかかった。

「アレー」と彼女は叫んだ。

途端に「カアア」と鳥が鳴いたので、私は思わず手をゆるめた。

「話さなきゃ、本当に殺すつもり？」

「うむ」

「じゃ、話すわ」

「話すか？」

「けれど、どんなことを話しても、わたしを裏切ったり棄てたりしちゃいけないのよ」
「決して」

「そう？ きつと？・・・実はねえ、わたし人殺しをしたのよ」

「そうか」と私は、さほど驚かなかった。

「けれど、自分で殺したのではないのよ。あの鳥を使って殺させたの」

「鳥？」と、私はいささかびっくりした。

「そうよ、私を棄てた、憎い男を、鳥に殺させたのよ。あの鳥はねえ、私の言いつけることなら、どんなことでもするの」こう言って彼女は鳥の方を眺めた。

鳥は籠の中でじっとしていたが、こちらを見つめている目はぎろりと光った。

「その男が義暦という名かい？」

「そうよ。あの鳥はよく人を覚えていての。義暦はわたしと同棲していて、よくこの鳥を抱いたわ。だから鳥はよく覚えていて、私が義暦を殺して来いと命令したら、義暦が庭園を散歩するところを、頸動脈をつつき切って殺して来たわ。警察の探偵も、まさか犯人が鳥だとは思わないから、とうとう事件は迷宮に入ったわ」

「それじゃ、義暦というのは古田男爵・・・」

「しっ！」と彼女は手をあげて私を制した。

「でも古田男爵の名は義暦では・・・」

「ないわ。義暦と言うのは私だけが呼んでいた名前よ」

「で、毎晩、その夢を見るんだね？」

彼女はうなずいた。

「それなら、なぜ、義暦さん堪忍してくれと言うんだい？」

「そんなこと夢だもの、何を言うか知れやしないわ」

私は彼女が憎い男を殺しておきながら、なおかつその男が忘れられなくて、心にすまないと思っっているから、ああした寝言を言うのだろうと思っただ。

私がそんな、とりとめのないことを考えているのを見て、彼女は言った。

「あら、どうしたの。わたしが人殺しをしたので厭気がさしたの？」

「いや、そうじゃない」

「いけないいけない。あなたは私に急に厭気がさしたんだ。きつとわたしを棄てるんだ。

ああ、くやしい」

こう言っただかと思うと彼女は矢庭にベッドを走り降りた。

「どこへ行く？」と、私は彼女を引き留めようとしたが遅かった。彼女は鳥を籠から取り出して私の傍へ戻って来たが、電燈の光に照らされたその姿は物凄かった。

「いいわよ。わたしにはこのお友達があるから。もし、私を棄てるならあなたもこうして

あげる」

あっと思う間に鳥はその堅いくちばしを以て、私の脳天をコツンとついた。

「よせっ！」と私は思わず、身を引くと、彼女はにやりと笑った。

「わたしを棄てるなら、いつでもこうしてあげる」更に彼女は鳥を私の頭に近づけた。

「よさないか！」私はベッドを飛び降りた。

「だって、あなたはわたしを棄てるんですもの」

「棄てやしない！」

「いいえ、棄てるに決まってる」

「違う」

「嘘だ、嘘だ」こう言って彼女は更に私に近づこうとした。

「よせよ、よせよ、その鳥だけは堪忍してくれ」

「だって」

「いや、決して棄てはしない」

「口ばかり」

「本当だ！」

「その証拠がないわよ」

「いや、ある」

「どこに？」

「俺も人を殺した」

「作り事だわ。私が人殺しを白状したから、気休めにそんなことを言うんだわ」

「本当だよ」

「だって、その証拠がない」

「あるよ」

「見せてちょうだい」

「よし、一緒に来い」

私は懐中電燈を持って彼女を地下室に案内し、そして壁の一部分に備えつけてあるポタシンを押すと秘密の部屋が現れた。

「証拠はこれだよ」

私は秘密室の一隅に置かれた寝棺の蓋を取った。防腐剤の匂いがプンとした。

「カー」「カー」と二声鳴いて、鳥は彼女の手を離れて死体の上に飛び下りた。

彼女は黙って鳥を抱き上げ、死体を横目で睨んで言った。

「まあ、頼もしいわねえ」

「納得出来たかい？」

彼女はうなずいた。

私たちは秘密室を去って、再び寝室へ帰った。その時分にはもう夜は大方明けていたが、私は彼女とベッドに腰かけて、女殺しの顛末を語った。私の話を聞き終わった彼女は、

「わたし、すっかり安心したわ。あなたの心を疑ってすまなかった。これで二人はいつまでも仲よく暮らせるわねえ。もう、この鳥もいらなくなつたから逃がしてやるわ」

と言いながら、彼女は窓に近づいて、鳥を大空に放してやった。彼女はしばらく、名残り惜しそうに鳥の行方を見ていたが、急に顔色を変えて、

「ああ、わたし、どうしよう。あの鳥を逃してはわたしの罪がばれてしまう」と、身を震わせた。

しかし鳥は一時間ほど経って戻って来たので、彼女は胸を撫でおろして安心したらしかった。

ところが、それから二時間ほど過ぎると、私の家の前が急に騒々しくなつた。彼女は早くも窓から様子を見て、

「ああ、大変、わたしの罪が知れたわよ。警察の人が私を引つ張りに来た。早くどうかして下さい」と顔色を変えた。見れば、なるほど私服の警官らしい男が二、三人しきりにベルを押している。私はとりあえず、彼女を地下室へ連れて行き、秘密室のボタンのありかを教えて、秘密室に隠れるように命じ、すぐさま引き返して、表の扉を開けると、あつという間に、私の腕に手錠がはめられたのである。

×

×

×

読者諸君、私がこの告白書の始めに書いた如く、私が決して白状すまいと思つた女殺しの秘密は、かくして「鳥を飼う女」のために、動かぬ証拠まで提供して、まんまと、白状せられてしまったのである。読者諸君はもう、お察しであらうと思うが「鳥を飼う女」こそは、私が殺した女の妹であつて、私に姉殺しを白状させる目的で私に接近し、遂に「寝言」のトリックによつて、みごとにその目的を達したのである。

ここまで書けば、後はもう多くを語る必要はない。二人の姉妹は由緒ある家に生まれたのであるが、事情あつて孤児となり、妹は遊女に身を落としていたため、姉は、それを恥じて、かの秘密の手紙の相手が妹であるにもかかわらず、私に打ち明けなかつたのである。二人は鳥を使つて、首環に手紙を結んでは文通していたのであるから、私に知れようはずはなかつたのである。鳥は妹のもとに飼われていたが、もと、彼女たちの父が可愛がつて育てたものであつて、伝書鳩などよりも遙かに賢く、一度フクロウの肝を噛んで食べさせてくれた人を決して忘れずに、もし空に放してやるならば、その人が、どこにしようとも必ず訪ねるのであつた。

姉が妹の手紙に返事をしなくなつたとき、妹はすぐさま警察へ訴えたので、警官は私の家に捜索にやつて来たのであるが、証拠が見つからなかつたために、主任の刑事は妹に勧めて私と同棲し、狂言によつて私に白状させるように事を進めたのである。彼女は姉の復讐のために、喜んでその役を引き受け、楼主の承諾を得て、鳥と共に私の家に棲み込んだのである。

古田男爵を殺したなどということはもとよりいい加減な作り話で、当時評判の事件だつ

たから、それをだしに使ったのに過ぎなかった。彼女が私の家に住みこむ前日、刑事は自らフクロウの肝を噛んで鳥に与えたので、私が女の死体を見せた朝、鳥は空に放たれて、まっ先に刑事を訪ねたのである。あらかじめ首環に仕掛けをして、私の自白の合図や刑事の承諾の合図が打ち合わせてあったため、刑事はすぐさま警官を派遣し、彼女は鳥が帰って来たときに首環を見て警官が来ることを知ったのである。

前にも書いたように、女探偵が身を任せてまで、その職分を尽くすということとはちよっと考えられないことだと思っていたので、私はつい気を許してしまったのである。それにあの鳥という鳥が、少なからず私の心をかき乱したため、とうとう、女の巧妙な仕草に釣り込まれて、まんまと罠にかけられたのである。それにしても、このような大仕掛けのトリックを考え出した刑事の頭と、三夜目ごとに根気よくうなされる真似をして、ぐんぐん私を深い穴へ引きこんで行った女の腕には、今なお感心せざるを得ないのである。